

論文審査の要旨

報告番号	修第 1302 号	氏名	弓川 大地
論文審査担当者	主査 宮川 哲夫 副査 三村 洋美 副査 稲葉 康子		
<p>(論文審査の要旨)</p> <p>「回復期リハビリテーション病棟でのエンパワーメント尺度の開発 -FIM との相関を踏まえて-」についての論文である。本研究は、エンパワーメント尺度を開発し、回復期リハビリテーション病棟の入院患者 98 例を対象に、項目分析、妥当性、信頼性、FIM との関連性を検証し、以下のことが明らかとなり、今後の尺度の構成概念（因子構造）および各項目の修正に関する示唆が得られた。</p> <ol style="list-style-type: none">1) 項目分析では、エンパワーメント尺度を構成する 17 項目のうち、16 項目で床効果が認められたが、G-P 分析と I-T 相関分析の結果を踏まえ、除外対象となる項目は無かった。2) 確証的因子分析による適合性は十分とは言えないが、先行研究に基づく当初に想定していた尺度構成で、回復期リハビリテーション病棟を対象としたエンパワーメント尺度の構成として一定の適合性を得ることができた。3) 内的整合性では一部の低位尺度で低い信頼性ではあったが、その他の低位尺度は一定の信頼性は得られた。再検査信頼性では全ての低位尺度で高い信頼性が得られた。4) 開発したエンパワーメント尺度は FIM との相関はほとんどなく、回復期リハビリテーション病棟に入院中から生活の質を含めた生活に必要な能力を、FIM とは別の視点で評価・介入する必要性があった。5) 今後、エンパワーメント尺度の選択肢の再検討、項目内容の修正・削除・追加を行い、より構成概念妥当性の高いエンパワーメント尺度の開発を行う。6) より構成概念妥当性の高いエンパワーメント尺度が完成した後には、基準関連妥当性の評価、入院期間での経時的変化の識別力の確認、退院後の生活状況との関連性の評価が必要である。 <p>過去の報告では、本論文のような詳細な検討はなされていない。また、研究目的、方法及び得られた結果の分析も明確に示されており、先行研究に関する検討も適切に行われている。今後の臨床に応用できる可能性は非常に高いものと思われる。したがって、本論文は修士（保健医療学）の学位に相当するものであると判定する。</p>			